

ることを暴きだす。

エヴェンソンの世界は取り返しのつかない世界である。直裁で冴えた言葉遣い、一見不明の時間と場所、予想を裏切る展開を追っていくうちに、気付けば後戻りできない場所にいる。たとえば2ページに満たない短編「アルトマンの舌」。冒頭でアルトマンはすでに死んでいる。語り手が殺人者だが、なぜ殺したのかは明らかにされない。その場に居合わせた Horst もあっけなく殺されてしまう。“There are two types of people ... type Horst and type Altmann. All people are either Horst or Altmann.” アルトマンタイプの人間とは、殺されてしかるべき者、殺すか殺さないかの二者択一で迷うことなく殺すべき人間。ホルストタイプとは殺すべきか生かすべきかはっきりしない人間。人生を厄介にするタイプである。とはいえ、この時点で語り手は前者ばかりか後者をもすでに殺してしまっている。語り手の目の前に広がるのは、二種類ある人間のどちらとも殺した後の世界、もはや選択肢がなくなってしまった世界である。

エヴェンソン小説で忘れてならないのは残虐のさなかに突如あらわれる奇妙な笑いだ。夢の世界の理屈が現実を侵食するような独特の非現実感があり、そこに乾いたユーモアが生きてくる。『開いた幕』の最終章、錯乱したラッドの現実には、ウィリアム＝フーパーの殺人現場が時空を超えて二重写しになる場面で、小道具の黄色い付箋が活躍、ひそみ笑いを誘う。緊張が高まり笑いに最も不穏当な箇所に黒い笑いを仕掛けておくのがエヴェンソン流だ。

短編“Killing Cats”はこう始まる。

“They wanted to kill their cats, but the problem was the problem of transportation. They invited me to dinner to beg me to drive them and their cats out to the edge of town so that they, the cat killers, could kill their cats.”

ずいぶんとぼけた幕開けだが、わたしたちは「猫殺し」という語の繰返しに身構えてしまう。語り手は、自分は手を下さない、ガソリン代を払っ

てもらう、という条件で、猫と「猫殺し」の知人らを車に乗せる。このわずか4ページの短編の語りは奇妙な距離感に満ちている。飼い猫を殺す理由は述べられず、語り手と「猫殺し」らの関係もいったいどういう性質のものなのか判然としない。「猫を殺す」という行為そのものについても、自分には関わりのないことと決めこんでいる。そんな語り手の無表情な口調に読者も距離を置いて判断保留せざるをえない。

ところが最後のページになって状況が一転する。

傍観者を決め込んでいた語り手が、いきなり殺す側へ無理やり転換を強いられる。その反転の鮮やかさ、しらばっくれた「猫殺し」たちの声、そして哀れ猫たちの末路——すべてが完璧なタイミングで謀られたクライマックス。困ったことに、笑わずにはいられないのだ。つい笑ってしまった自分を呪う間もなく恐怖が訪れる——世界のどこかでいつもたくさんの猫たちが殺されている。怖いのはそこではない。重要なのは誰が殺すか。殺すのが自分でさえなければいいのだと、傍で見ていたわたしたちは語り手とともに痛感する。まるでそのことを確認するためだけのよう猫は殺される。誰が手を下そうが、結局猫たちは殺されてしまう。

続いては犬に登場願おう。“Job Eats Them Raw, with the Dogs”は爽快に残酷で愉快的な物語、ベケットやロバート・クーパーの世界と地続きだ。ここではすっかり骨ばかりになったヨブが野良犬を従えてどこまでも続く書割りのような西部の荒野を旅している。状況だけを追うとなんとも子供じみた残酷譚だが、聖書からそのまま出てきたようなヨブの大仰な嘆きの口調と、朴訥な西部訛りの木こりとのやりとりが珍無類で、極上の不条理漫才のよう。短編は旅のスナップショットのような乾いた短章からなっていて、ヨブの理不尽な災難が続々描かれる。でもヨブは不死身だから心配無用、骨がはずれてもまたはめれば大丈夫。唯一の心配はヨブがいったい何を「生で食す」ことになるのか、の一点である……。

『アルトマンの舌』にはヨーロッパ趣味の短編も多い。“The Munich

Window: A Persecution" は一見明らかにオーストリアの巨匠 Thomas Bernhard のパスティーシュとして始まる¹⁾。執念深く陰鬱で偏執的に理知的な語り手が延々と自分語りを展開する。改段はほとんどない。妻が次女を道連れに飛び降り自殺、長女も自殺未遂と、いかにもベルンハルトらしく救いのないお膳立てが整ったところで、語り手はミュンヘンの長女をしぶしぶ見舞いに行くのだが、次第に彼はベルンハルト的主人公とはまったく異なる病理の持ち主であることが明らかになってくる。すなわち、この父親は幼いころの長女を性的に虐待した上、妻を窓から飛び降りるよう仕向けたようなのだ。しかも自分が正しいことを一分も疑っていない上、長女が探し出した虐待の証拠写真を巧みに取り戻そうと画策する伶俐さも持ち合わせ、さらに長女に付添っている精神分析医を列車のトイレの中で撲殺してしまう。まさしく怪物なのである。主人公のおぞましさ、告白ではなく、絶え間ない自己正当化（しかも相変わらずのベルンハルト節！）によって明らかにされてゆく過程はスタイリストエヴェンソンの面目躍如、主人公の存在そのものに身震いしながらも、その語りのアクロバットに舌を巻く。長女の命運も気がかりだ。その上、そんなさなかにもやはり笑えるのだ。状況の珍妙さと語り手の過剰な自己愛が渾然となって生じる強烈なおかしさは、恐怖のスラップスティックとでも呼ぶべきであろう。

2004年に実験文学専門のFC2から出版された短編集 *The Wavering Knife* が、International Horror Guildの最優秀短編集賞を受賞した例に見られるように、ブライアン・エヴェンソンは、純文学とジャンル小説

1) エヴェンソンによるベルンハルト論は以下を参照のこと。

Bernhard, Thomas. *Three Novellas*. Trans. by Peter Jansen and Kenneth J. Northcott. Foreword by Brian Evenson. Chicago: U of Chicago P, 2003.

の境界をまたいで活躍するニューウェーブファブリスト²⁾の典型、その中でもっとも知的想像力豊かで冒険的なおかつスタイリッシュな作家だろう。小説以外の仕事も活発で、毎年一冊のペースでフランス文学を翻訳しているほか、*The Review of Contemporary Fiction* の書評家も務め、クーヴァーの概説書³⁾を出版している。またブラウン大学文芸科の自主出版の伝統にのっとり、「謎のスウェーデン人作家 Bjorn Verenson」による、同名の探偵が主人公の犯罪小説シリーズの「あらすじ」を手綴じ冊子で不定期に刊行中だ。次回作の長編 *Last Days* はホラー系出版社 Underland Press から 2009 年に刊行予定。新しい短編集もミネソタの Coffee House Press から出版されるそうだ⁴⁾。

—— 吉田恭子

2) ニューウェーブファブリストのより詳細な定義、マニフェスト、作品例については以下の 2 冊を参照のこと。

Straub, Peter, et al. *Conjunctions: 39: The New Wave Fabulists*. New York: Bard College, 2002.

Morrison, Rusty, and Ken Keegan, eds. *ParaSpheres: Extending Beyond the Spheres of Literary and Genre Fiction—Fabulist and New Wave Fabulist Stories*. Richmond: Omnidawn Publishing, 2006.

3) Evenson, Brian. *Understanding Robert Coover*. Columbia: U of South Carolina P, 2003.

4) 最新情報については作家本人のウェブページ www.brianevenson.com を参照してほしい。